

---

# とある天才の幼馴染

紅猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある天才の幼馴染

### 【Nコード】

N51860

### 【作者名】

紅猫

### 【あらすじ】

上条当麻には小さい頃から1人の幼馴染がいた。とある理由で外国に滞在したが彼女と再会するとき、物語が始まる！時間軸は11巻後です。基本、原作沿い+オリジナルで話が展開します。

## プロローグ

8月1日PM10:35

現在位置アフリカにある小さな村！。

人工による光がなく星がきらきらと瞬いている！。

1人の日本人女性が星を眺めながら小さくつぶやく。

「…会いに行くから…」

「…これで終わりなんてさせない…」

さらに拳を強く握りながら…

「君は絶対に俺たちが守る…！」

「絶対に…絶対に終わりなんかさせない…！」

ギリつと歯を噛み怒りを込めて遠くにいる相手に恨みがましく…

「アレイスター…！！！」

そして手には幼い子ども2人が楽しそうに笑っている写真が握られていて女性はそれを見る。

1人は女性のもの…

もう1人はー…

「…うま……」

切なく、儚く、つぶやいて  
その言葉は風に乘せて、空に流れるー…。

## プロローグ（後書き）

『とある天才の幼馴染』が始まりました！  
とあるを読んでからずっと頭の中にあって、話が進むにつれて膨らんでいきました。

この物語をずっと胸の内に留まっていきたかったのですが、もうキリがつけられなくなったというか…！っそ吐き出した方が楽だろう  
と思って書きだしました…；；

とある天才の幼馴染をどうかよろしくお願いします。

## 突然現れた幼馴染（前書き）

### 注意

・当麻とオリキャラ（聖）は何故か妖しい空気も出しますが、あくまでもふざけ合いなので幼馴染であり友人以上の関係はなりえませ  
ん。

・オリキャラ（聖）は女性です。1人称が俺だけど女性です。  
以上のこと踏まえてお読みください。

## 突然現れた幼馴染

1人の女性が学園都市の入り口の近くに立っている。  
なにしろ先日まで外国にいたのだ。

今日、日本に到着し、学園都市で勉強するためここまで足を運んだのだ。

「やっと着いたか…。相変わらず広いなー、ここは。」

疲れた様子を見せるが、表情は非常に晴れやかな顔をしている。  
まるでこれからの未来を楽しむかのように。

彼女は勉強するためだけに学園都市に来たわけではない。  
ただ勉強するならどここの場所だってできる。

彼女が学園都市を選んだのは彼が学園都市にいるからである。

「元気してるかなー、当麻は。」

## 第1章 突然現れた幼馴染

「うだー、今日も疲れたー…。」

1人の少年・上条当麻は帰りの帰路を辿っている。

今日はテスト週間のため早めに授業を終えており、現在の時刻は昼に近い。

今の季節は秋の間近だがまだ夏の名残りが残っている。

大覇星祭の2週間後だ。

まあその前にクジで当たったイギリス旅行券を使ってインデックスと行ったわけだが…。

なんかゴタゴタに巻き込まれて大怪我を負ってちつとも身体が休まらなかった。

「不幸だー…。」

いつもの口癖をつぶやきながら今日の晩御飯を考える。

外食もいいのだが、少しでも節約したい彼にとってはそちらの選択はしない。

それに彼の同居人はかなりの食量を食べるので金のかかる外食は控えている。

彼の同居人の名はインデックス。

イギリス静教・ネセサリウスに属し、1万3千冊の魔導書を記憶している「歩く魔術図書館」と呼ばれている少女だ。

見た目は14歳に見えるが実年齢が分からない完全記憶能力の持ち主だが、魔術は使えない。

それは魔導書を使われる危険から遠ざけるためにネセサリウスがそういうふうにしたのだ。

彼女につけられた首輪と称する「ヨハネのペン」もそのためである。

しかしそれを破壊した当麻はその記憶はなかった。

彼女を助けるためにドラゴンブレスから出てきた羽が彼の頭に直撃し、エピソードつまり思い出や過去のことを全て忘れてしまったのだ。

優しい彼は少女を傷つけないために笑顔を失わせないために…その事実を自らの手で…

覆い隠したー…。



（インデックスには昼ご飯を用意してるからなー。どっか行って暇でも潰すか。）

「だから離せって言うてんだよ！！」

「！！」

かなり大きい声をして叫ばられてひっくり返りそうになった。

いや、問題は叫んでいた声が女性らしきものだった。

叫んでいた方向を改めて向き直すとそこには不良たちにかこまれて完璧に見えはしなかったが確かにその中心には女性がいた。

「おいおい女がそんなでかい声出すもんじゃねーだろ。」

「お前らが出させてるんだろーが！！」

（…もつともだ…）

呑気にそんなことを考えてしまったが、そんなことしている場合じゃない。

どうやらあの不良たちは彼女に対して不埒なことでもしようとしてるのが明白だ。

実際に奴らの目がすんごくいやらしい。

「とりあえずそこをどけ！！お前らが相手してる暇は微塵もねえんだよ！！」

「てめえがおとなしく俺らに付いてくりゃいいいつてんだろ。そんなに時間はかけねえからさ。」

「相手してる暇がねえつつてんだろ！」

なんとも威勢がいい男らしい女性だが分が悪い。

不良は全員男だ。

実力行使にでもたら女の腕力じゃかなうわけがないだろう。（一部違うヤツもいるが…それは置いて）

ここは駅の近くであり人通りが多いはずだが、通る人々は助けようとしていない。

いや、実際助けたいが不良が怖くて手が出せない人が多いってところか…。

結果なにも出来ず、ハラハラしながら事の成行きを見守っている。ちらほら女性を心配する眼差しが多い。

（仕方ねえ…。）

上条当麻は見守る方ではない。ましてやマゾヒストでもない。ただ目の前で困ってる人がいるから放っておけない性質なのである。

「はなせって…！」「おい。」

助けられるのなら自分が傷つけられることも厭わないのだ。それが上条当麻というものだ。

「そいつが嫌だって言ってるんだろ？離してやれよ。」

「あ…。」

「ああん？なんだよ、てめえは。」

「そんなのどうだっていいだろ。だいたい女1人相手に男がぞろぞろと囲んで恥ずかしくねえのかよ？」

「あんだと…！」

「ぶっ殺せ！」

「ヤベ！？おい、走れるか！？」

「え！？あ、ああ！」

当麻は女性の手を握り、不良から離して走り去った。

無論追いかけてきたが、しばらくすると不良たちが追いかけることを諦めたのか単に見失ったのか解らないが後ろを振り向けば追いかけてくる気配はなくなった。

「ふはー…巻いたか。おい、大丈夫か？」

一緒に逃げていた彼女は下を向き顔は見えなかったが、荒い呼吸し、なんとか息を整えようとしている。

逃げてたとはいえ、男である当麻の脚力に女性は追いつけなかったようである。

「だ…大丈夫…げほ…運動は出来る方だが…も…もう少しスピードを落としてほしかったな…げほ…！」

「あ…悪い…。お詫びにジュースとか買ってくるからそのベンチで待っててくれないか？」

「ああ。少し休ませてもらう。すまないな。」

「いいって。じゃ待っててくれ。」

女性の顔を見ることがもなく当麻は自動販売機の方に走って行った。

「相変わらず走るのが早いな…げほ…！」

この声を彼は聞くことはなかった。

+++++

「ほい、買ってきたぞ。」

「サンキュ。」

まだ呼吸が荒いがさつきよりは幾分落ち着いてきたようだ。  
顔は下を向いたまま手だけ動かしそれを受け取った。

「ふはー。生き返るー。」

「紅茶だけどそれで良かったか？」

「飲み物は好き嫌いないし、なにより助けてもらった人から貰うモノは無下には出来ないだろう。」

「そりゃまあ……。」

「そうだ、まだお礼を言っていなかったな。助けてくれてありがとう。」

「

そのとき、ゆっくりとスローモーションのように彼女は当麻の顔を見た。

当麻は初めて……

彼女の顔を見る……

（うわ……！）

助けた時も、逃げてた時も、一度だって当麻は彼女の顔を見てなかった。

（こんなに美人だったのかよ！？）

オルソラのような慎ましさを感じる美人とも、神裂のような強さを感じる美人とも違う。

彼女はピアスしてるだけであんまり飾り気がないのに彫刻のように作られた感じで品が漂うのだ。

顔はもちろん整っており綺麗と感じられる美しさだ。

肌も生まれた赤ん坊のようにキメ細やかで荒れさは微塵も感じられ

ない。

服装は簡素だがそれが一層に彼女という存在を際立てている気がする。

髪は黒くて長く枝毛はないんじゃないかと思うほど艶やかだ。

瞳は日本人では見られない藍色で夜をイメージさせるようで綺麗だった。

それらまとめるとまるで完成された世界最高の彫刻品のようだった。今、目の前に本当の美人はどういうものか見せられた気がする。

というか世界で彼女しかないんじゃないんだろつかと思わせるほどだ。

どうしてあの不良たちに構われたのが解った気がする。

「?おい、どうしたー?」

「はっ!?!」

上条当麻はオルソラや神裂のような美人さんに接することが多かった。め意識を取り戻すには時間がかからなかった。

普通彼女に初めて会う男性には取り戻すのに5秒はかかってしまう。それほど人を魅了する女性ということだ。

「あ…悪い!え…と…どういたしまして!!!!!!」

いくら美人さんが多く接触したとしても照れるもんは照れる。

思春期真っ最中の16歳上条当麻だ。

「そんなにかしこまなくてもいいんじゃないか?俺とお前の仲なんだし。」

え…?

今、何といった…?

彼女は近づいて当麻の耳元に声をかける。  
それも当麻しか聞こえない小さな小さな声で…。

「まあ、忘れられても仕方ないよな…。だって君は…」

徐々に少し寂しさを帯びた声に変わる。

当麻は嫌な予感がした。

まるで秘密が明るみに出してしまった気がした。

「記憶を失っているんだから。」

ばっ！！！！

瞬間当麻は彼女から距離を取るように腕をふるった。

幸い彼女には当たらなかったが、当麻はそれを気にしている暇がなかった。

当麻のとしては記憶喪失のことを絶対に明かしてはならない事柄だからだ。

インデックスが泣くかもしれない。

そんな想いを抱きながら…。

「なんで！！」「しー！！」「んあ？？」

面を食らった。

彼女は人差し指で口を当てていた。

『静かにしろ』の合図だった。

また当麻しか聞こえない小さな声で

「君にとって記憶喪失のことは誰にも明かしたくないんだろ！？場

所を考えて!!」

そうだった。

ここは中央公園。しかもかなり広い公園だ。

当然、昼なので人はたくさんいるし、俺たちの近くに通ったカップルらしきの人が疑問の眼差しで向けられている。

大方、俺が先ほど叫んだことを気にしてしまったんだろう。

カップルは何事もないようだと思ったのか俺たちから離れて行った。

「…そんなに警戒しないでよ。傷ついたじゃないか。」

「…悪い。でもどうして…。」

どうして知っている。

記憶失う前の俺と知り合いなのは解る。

だが、記憶を失っていることは俺とあの医者しか知らないはずだ。

「んー、ここじゃ人が多いし、まず話せるところへ案内してくれないか？」

+++++

「君にしちやめずらしいな」

そこは古ぼけた、でも緑もあって品のあるバンガローのようなおしやれな喫茶店だった。

人は少ないがコーヒーの香りがすごくいい。

低価格でこれを飲めるとは驚きだ。

2階建てなので、店員があまり通らない2階の方の端側に席を取った。

「昼食べてないから頼んでもいいか？」

「おう。ここは食べ物でもうまいからな。」

店員さんにオーダーし、注文品が来てから話した。

その間に世間話をしたが、本題はここからである。

「んじゃあ、聞くぞ。どうして記憶喪失のことを知ってるんだ？」

注文したアイスコーヒーを飲みながら彼は聞く。

「話すと長いけどね。まず俺との関係から話そうか。」

彼女はダージリンティーにミルクを入れながら話を始める。サンド  
ウィッチイを食べながら。

「俺の名前は…忘れてるだろうから紹介するよ。月神つきかみ 聖ひじりだ。」

「月神…さん…？」

「…君にそう呼ばれるとむず痒いなあ。呼び捨てで聖でいいよ。前  
の君はそう呼んでたんだ。」

「聖か…。」

解っていたとしてもやはり覚えていなかった。

名前で呼んでいることからにして彼女とは親しかったんだろう。多  
分インデックスよりも…。

「こら。しんみりするな。話にくいじゃねえか。そんな顔をして  
ほしくて話してるんじゃない。」

「あ、悪い！」

「んじゃ、続けるぞ。君と俺は生まれた時から幼馴染の相柄なんだ。



」

沈黙。

しばらくして…。

「お…おさななじみ…？」

いたのか？俺に？

「…なんだ、その疑問に満ちた目は？言つとくが嘘はいってないぞ？」

何というか目の前にすんげー美人さんがいるんだぞ？

スーパーウルトラ美人さんがこの上条さんと幼馴染？

こんなおいしい話があるわけねえだろ！！！！

と言おうとしたが…

「写真あるけど見るか？」

言う前に聖によって遮られてしまった。

「ほれ」と手渡してきた写真の中には2人の子供が映っていた。

1人は明らかに上条当麻。そしてもう1人は…

「聖…なのか…？」

思わず疑問形になったが、確かにもう1人の子供は確かに聖のものだった。

2人で仲良く遊んでいる光景に当麻は暖かく感じられた。

覚えていないはずの記憶なのに…

「聖…」

「ん、なに？」

「悪い。ホントに覚えていないんだ。」

どんなに仲が良かったのか今の当麻には覚えていない。

聖がどんな人物なのか今の当麻は知らない。

なにか大切なものを失ってしまった気がしてなんだか申し訳ない気持ちになった。

「いや。君が悪いんじゃないんだ。謝ることじゃない。」

「でも…」

「本当に気にしなくて良いんだ。どうせ君のことだから、記憶を失うような出来事を直面していたのなら…」

聖は断言した。

まるでその場を見ていたかのように…。

「何か大切なものをなにがなんでも守り通したかったんだろう？。」

驚いた。

彼女は上条当麻の人間性の全てを知ってる…。

「君はそういう奴だ。守れたか？」

優しく微笑みながら彼女は問いた。

「…ああ。」

彼女のことは覚えていない。

けど彼女は俺を知っている幼馴染として言葉をかけてくれた。

「あ、そうだ。俺と幼馴染なのは解ったけどさ、どこから記憶喪失のことを知ったんだ？」

聖の正体は俺の幼馴染だと解ったが、それじゃ記憶喪失を知ったという理由にはならない。

「あー。もともとそんな話だったな。」

「…おい。」

「はは！冗談だ。君は俺に対してもう疑いは無くなったようだし、続きといきますか」

「う…。」

確かに聖が紹介される前は警戒や疑いを持っていた。

それは当麻が魔術側と接触が多いため油断はならなかったためである。

正直、聖自身も魔術側かもしれないという疑いが当麻にはあったのだ。

「…悪い。」

今となつては仮にも幼馴染に対して本当に悪いことをしたと思う。

「君が記憶喪失だということを俺は知ってるからな。突然知らないヤツにそんなこと言われたらそりゃ警戒心も抱く。それを知っててやったんだから気にするな。」

一呼吸を置いて、

「俺はもともと学園都市の生徒じゃないんだ。今日外国から帰国し

たばかりだ。」

「…は？」

外国…？

幼馴染でしかも親しげに接してくれるから日常的に一緒にいるのだ  
と思った。

「外国って…。じゃあ能力はないのか？」

「ない。」

キツパリとした答えが返ってきた。

「外の学校に通っているのか？」

「おいおい、この学園都市は配送車諸々、生徒の親や兄弟でもよっ  
ぽどでもない限り入れないところだろう。」

「しかも申請してパスを貰わない限り無理だ。」と付け加えた。  
そのとおりだ。

友達だからって幼馴染だからって一般公開される日でもない限り学  
園都市に入れるわけがない。

「ちなみに俺は外の学校すらも通っていない。」

「へ…？」

今度こそ本当に訳が分からなくなった。

（聖は俺と同じ年だよな…？）

先ほどの写真を見る限りそう見えた。

子供の身長は著しく成長するため、1年成長したら1年前の子供と

比べるとかなり差がある。

まさか聖は本当に小萌先生のような未知的な存在なのか？

「俺と君は同じ年だよ。この年で20歳過ぎに見えるのはマジ勘弁。」

どうやら表情に出ていたのか聖は当麻がなにを考えていたのかを見抜いて言葉をかけてきた。

「正しくは通ってないんじゃないから、通う必要がないから。」

「?????」

「俺、すでに大学卒業してんの。」

「はあ!!?」

「10歳のときに大学卒業してしばらく研修生として学園都市にでかい大学病院で勉強してたんだ。」

聖の説明からするとこういうことらしい。

彼女はもともと医学に対して天才的であったため10歳で外の大学で大学卒業単位を取得し、さらに勉学をするため学園都市にある病院にきた。

当麻は小学生から学園都市にいた。つまり一度は当麻と別れていたという。

学園都市に来てから当麻と再会しよく一緒に遊んでいたの。そして14歳の春、学園都市での勉学を終えたとき、正式に医師免許を取り、医者になることができた。

でも、まだ若すぎるため当分はある医師の下で助手として働いていた。

16歳の春の終わりにある医師が

「『国境のない医師団』に欠員が出たんだ。3か月しか参加できないがどうだ、君、やってみないかね？」  
と言われて聖は驚いた。

『国境のない医師団』とは文字通りで医療が万全ではない貧しい国を巡って無償で診療を行う世界最高峰の医師の集まりのことだ。

あまり大人数では移動できないためメンバーは20人弱ぐらいであり、希望すれば参加できるそんな簡単なものではない。

技量の他に体力、国によって異なる伝統、文化、歴史、言語までも知識に入れておかなければ通れない狭き門なのだ。

そんなグループに自分は参加させてくれるというのだ。

団員と比べて腕も経験も浅はかなのは明白であり、迷惑かけるかもしれないと思つて聖は承諾したのだ。

出発したのは7月の半ばだった。

ちょうど夏休みの前だった。

「日本の時刻で言うと7月31日の夜に先生から電話があつたんだ。俺と君の仲をよく知つてたからね。」

「誰なんだ？その先生って…。」

「君も知ってるはずだ。なにしろ何度も世話になっているらしいし。」

「…まさか…。」

1人しか思い浮かばなかった。いや実際には1人しかいない。

「あのカエル医者か？」

「カエルって…失礼な言い方だな。カエル…見えなくもないけど…そうだよ。」

「…誰にも言うなつて言つたのに…」

心底恨みたくなった。

誰も言わないって約束したのに…！

「おいおい先生は悪くねえよ。俺にそれを伝えたのは君が目覚める前だ。」

「え…？」

「あのとき君が重傷を負って脳の一部を破壊されているという事態を俺に伝えてくれたんだ。多分一番仲が良かった自分に伝えるべきだと判断した後すぐに電話をしてくれたんだろう。君が先生と約束する前に俺は知っていたんだ。」

「…知っててどうして俺に会ったんだ？」

「ん？」

「普通、会わねえだろ…？聖のことも昔のことなにもかも覚えていない、記憶喪失のこと知られたくない俺に会わないだろ！？」

知ってるはずだ。俺がこのことを誰にも知られたくないことを。

解っているはずだ。昔の俺はもういないことを。

なのに、なんで…？

「最初は泣いたよ。」

ぼつりとそう呟いた。

「ずっと一緒だった君がもうどこにもいないと解って、任務中だったのにも関わらず泣いたよ。1日中泣いてた時もあった。団員の皆にもすごく心配かけたな。」

「……………」

「けどね、本当にずっと一緒だったから、君から離れたくなかったから、この絆を失いたくなかったからたとえつらくても君の下に来たんだ。ねえ、わかる？」

「…俺は…」

「昔の君が好きだった。今の君も好きになりたい。だって君は君だからこそ一緒にいてふざけあって、笑いたいんだ。」

「…！」

認めてくれた気がした。

インデックスが俺の病室で過去のこと何もかも失くした俺の姿を見て泣きそうになり、崩れそうになっていた。

彼女のためにとっさの嘘をついて、昔の俺を気にして演じながらここまでできた。

だけど聖は今の俺すらも見てくれていた。

「…ありがとう、聖。」

「ああ。」

当麻は聖の手を握り素直に感謝の言葉を述べた。

実際ああいう言葉には慣れていない上条当麻は照れ隠しに、

「…けどな、さっきのは愛の告白っばいぞ。」

そう茶化して普段なら、殴られるところだが聖はしなかった。

「はは！かもな〜！」

軽やかに笑っていた。

俺はその反応に驚いたが、昔の当麻もそんな感じだったと言ってくれた。

昔の俺と今の俺とあんまり変わってない気がして少し救われた気がした。



「もしさ、君が昔の君を知りたかったら話すよ。気になるだろ？」  
「気になるっていえばなるけど…その前になんで俺の名前を呼ばないんだ？」

「あー…、いきなり君にとって初対面の相手に名前で呼ぶなんて馴れ馴れしいと思ったから…。もういいのか？」

「なるほどな？。悪かった。どうぞ。じゃんじんと上条さんの名前を呼んでくださいまし。」

「んじゃ、当麻！」

彼女は嬉しそうに呼んで笑った。

本当はずっと呼びたかったんだろうと思って申し訳なく思った。

彼女は1から今の俺との関係を新たに築こうとして、今の俺を知ろうとしてくれてる。

本当に嬉しかった。純粹に。

「どうする？強制はしないけど。」

「んー知りたいな。昔の俺はどんな感じだったか気になるし。」

「16年分だからなー。何から話せばいいんだろ？」

「じゃあさ、小さい頃から。どんな遊びしたか覚えてるか？」

「確かあの頃は…」

聖は小さい頃の俺の色んなことを話してくれた。

とはいっても小さい頃の遊びや俺の両親と聖の両親は親友らしく交流も多かったらしい。

家がお隣同士になるほど仲が良かったようだ。

まるで他人事のように感じてしまっただけ虚しかったけど…

聖はこれから築いていけば良さそうと笑って応えた。

そうやって昔のことを話しながら少しずつ時間が過ぎて行った…。

「うわ！？もうこんな時間！？」

時計を見ると5時半過ぎだ。いくらなんでも長話過ぎだろうと2人とも反省していた。

「うゝ…話し足りないけどここまでにしよう。付き合わせて悪かったな。」

「いや、会えて良かったよ。退屈しなくて済んだし楽しかったからな。」

「そういうところは変わんないんだな。無自覚さんよ。」

「いんや、俺も会えて嬉しかったよ。今日君に会って本当に良かった。」

なぜだか解らないが当麻は顔を赤くなるのを感じた。

「当麻。」

「え！？な、何でございますか！??」

日本語がおかしくなってしまうたが聖は気にせず彼に近づいて…そして手を繋ぎ、聖と当麻の顔を合わせた。  
当麻は驚いて

「ひじ…!？」

名前を呼ぼうとして止めた。

なぜなら彼女は何かを話し始めたからだ。

「記憶を失っているいろいろ苦勞するかもしれないが…頑張ってくれ。君の周りにそのことを知られたくないのなら尚更だ。過去のことですら苦悩するのなら俺の下にこい。言葉をかけて安心させてやる。過去

のことでどうしようもないことにぶつかったら俺を呼んでくれ。昔の当麻を覚えていて俺がなんとかする。俺は当麻を失いたくない。俺にとって君は大切な人なんだ。」

恥ずかしい告白まがいなセリフだが聖は真剣だった。

どれほど彼女が当麻のことを想っているか直に伝わってきた。ならばその相応の言葉を彼女に伝えるべきだろう。

16年も一緒に生きてきた大切な幼馴染へ？…。

繋いでる手を少しだけ力を込めて彼は言った。

「俺は確かに過去の記憶はない。けれど聖がこうして目の前に来てくれたんだ。いつも不幸だと言っているけど、今は幸福だと感じられる。これほどお前が俺を想ってくれたんだ。今の俺はこんなだけど、これからも一緒にいてくれるか？聖のこと知りたいんだ。俺も聖を大切な人として見ていきたい。」

恥ずかしかったが、当麻は精一杯応えた。

本心からの言葉だった。

彼らの間に偽りなどなかった。

彼らには他の人では絶対に結べない信頼や誰よりも替え難い絆で結ばれている？…。

「？ありがとう、当麻。」

ほとんど泣きそうな声で彼女は言った。

それが合図となりどちらからでもなく抱きしめ合った。

まるで自分の半身が再会したかのように…。

+++++

午後6時15分頃上条当麻は帰宅した。

1人の少女・インデックスが駆け寄ってきた。

「お帰り？当麻。遅かったんだよ。」

「ん？ああ、ちょっといろいろあったからな。」

「…？どうしたの？なんかいつもより顔が晴れやかなんだけど？」

「久しぶりに良いことがあったからな。」

「？？？」

当麻は落っこちても、落雷にあつても壊れない頑丈な携帯電話を取り出し、ある人物の名を見ていた。

帰る前に聖とメアド交換をしていたのだ。

『月神 聖』

本当に衝撃な1日だったが、彼女と出会えたことが何よりも幸福だった。

自分を大切だと言葉で伝えてくれたことが嬉しかった。自分の過去のことを知っている彼女に会えて嬉しかった。

いろんな嬉しさが混じり合ってその感情を糧にさらに前を向いて歩ける気がする。

不思議なことに歩く力は非常に軽やかだった。

インデックスは上条当麻の顔を凝視していた。

顔は非常に穏やかで優しそうで、何か大切なものを見てるような？そんな表情だった。

（なにを…だれを…見て…るの？…？）

ギュッと胸をつかんだ。

なんだか…とても誰かに当麻を取られた気がした？。

## 突然現れた幼馴染（後書き）

当麻「そついやなんで俺のケータイに聖のアドレスがなかったんだろ？」

聖「ああ…。それか…（笑）」

当麻「？なんかあんのか？」

聖「大したことじゃないんだが…聞くか？」

当麻「（嫌な予感がする…。）あ、ああ…。」

聖「そうか。むかーし昔あるところに俺が『国境のない医師団』の一員として学園都市から旅立ちました。見送りに来た少年は1人で寂しく家に帰りました。その時の時刻が昼頃だったため、お腹を空かした少年は家に帰る前に昼食をとりました。食べ終わった少年はお手洗いに行きたくなり、そこで用を足しました。ところが…。」

当麻「……………」

聖「ケータイがポケットから落ち、トイレの底に沈んで流されてしまったのです。」

当麻「不幸だあああああああああああああ！！！」

聖「…とまあ、おかげであつちにも連絡がとれなかったけどな。」

当麻「…なぜあなたはそんなことを知ってるんぜう…？（泣）」

聖「君が俺の先生に言っただけに俺に伝えさせたんだよ。『ケータイがトイレの底に流されたので連絡できません。』てな。」

当麻「……………（泣）」

## 俺の幼馴染はすごいヤツ

「インデックス、起きろ！朝飯だぞ！！」

「あううゝお布団」...

「いい加減、起きなさい！」

## 第2章 俺の幼馴染はすごいヤツ

AM 7:45

「つたく、いつまでも起きないから朝飯冷めちまったじゃねーか」。

「

テレビをつけて、朝のニュースを見ながら朝食をとり始めた。

うん。冷めてるけどベーコンエッグがうまい。

目をこすりながらインデックスも口を大きく開けてパンにかじりつく。

「そんなこと言っただって仕方ないんだよ！お布団が気持ち良すぎて出られなくなってたかも！」

「気持ち良いのは解るが、布団のせいにすんな。ふと...んの.....。」

「？当麻??」

何故か固まってしまった当麻に不審に思いながら彼の名前を呼んだ。揺すっても呼んでも応答がなかったので、インデックスは彼の視線をたどりながらあるモノを見た。

テレビだった。

テレビに映っているのは1人の女性がインタビューを受けているところだった。

この世のものとは思えない美しさで同性ながらもインデックスはしばらく見惚れていたが、しばらくしてはつと意識を取り戻した。普段なら知らない女性に当麻が見惚れている状況は気に食わなくて怒りで彼の頭にかじりつくところだけど、この女性なら…

（この人なら仕方ないのかも……）

でも、悔しい気持ちがあるのも事実で、半ばヤケになって残った朝食をとり始めた。

そして上条当麻の分も食べてしまい今日の朝食は全てなくなった。

このときインデックスは知るよしもない。

テレビに映っていた美しい女性は上条当麻の幼馴染だということに  
！…。

+++++

PM 12:40

「ねえねえ、見た？」

「見た見た！スッゴイきれいな人だったよね！」

「あれで俺らと同年かあ…。信じられねえな。」

…朝からずっとこの調子である。

この学校は（…いや、この学園都市全体かもしれない…）朝のテレビに出てていた1人女性のことで話題になっていた。現在昼休みだが、この話題が途切れることはなかった。

……混ざりにくい……。



なにしろ話題の中心になっている人物は先日に出会った上条当麻の幼馴染・月神聖だ。

幼馴染に対してどう評価しろと？

上条当麻の心情をお構いなしに青髪ピアスが突進するかのようにつちに走って来た。

「かみやくん！なあなあ、テレビ見たん！？見たよね！？見たよね！？えっつらい美人さんやったな～！あんな人がお隣にいてくれたらメツチャ幸せやと思わへん！？」

…いやいや、普通でしたよ。上条さんのには。つーか朝も言ったよな、それ。

「にやー。確かに見たときは驚いたぜい！しかも冥土返し（ヘヴンキャンセラー）がいる病院で勤務してるぜよ。容姿端麗、頭脳明晰、性格は知らんが金銭的に問題なし！女として申し分ないところがまさに高嶺の花って感じだにやー。」

…高嶺の花？アイツが？

確かに外見は綺麗だが、中身は至って普通の女子（男勝りな部分もあるけど総合的に見て…）って感じがするよな…。

「…やん…みやん……」

けど言われてみれば俺ってとんでもない幼馴染を持つてんな。14歳で医師になるなんて天才でもない限りできないよな。

…あり？そっぴやなんで医師なんて目指したんだ？

「かみやん！！」「ドゴン！！」

「ぶばおっつ！！！？」

な、何が起こった！？

っ！か殴ったよな、今殴ったよな！？

「何すんだああああああ！！？青髪ピアス！！」

「ちょ、いやいや待て待て待って！！殴ろうとしないで、かみやん  
！」

「呼んでも返事なかったぜよ？マイワールドにお出かけしてたっばいから戻してもらったただけだぜい？青髪ピアスに感謝するんだにや  
ー。ところで、かみやん？」

「何だよ？」

「ケータイのバイブがさっきから鳴っててうるさいぜい。止めてくれんかにやー？」

「…え？」

ブーブーブー…

…本当だ。

聖のこと考えすぎて気がつかなかったのか。

「わ、わり…！今、出るからって……ぼっほっ！？」

着信『月神 聖』

今、話題の中心になっていた彼女からだった。

「す…すみません！上条さん突然の頭痛で保健室に行って参ります  
！…って、ついて行こうとすんな、青髪いいい！」

「ちょ…待ちなさい、上条当麻！もうすぐ5限目が始まるわよ！」

あからさまな嘘をついてるのがバレバレだがそれどころではない。急に様子が変わった当麻におかしく思いながら興味本位でついて行こうとした青髪ピアスに牽制し、吹寄の声に気づかなかったフリをして保健室ではなく今の時間帯なら誰もいない屋上へと向かった。上条当麻の突然の行動にクラスメート全員はポカーンとしている。

「上条君、どうしたんだろ？」

「知らないわ。どうせ上条のことだから下らないことなんでしょう。」

姫神は様子が変わった上条に対して心配はしていたが、吹寄はいつものことだと簡単に処理していた。話題の中心になっていた人物から突然電話がかかってきた上条当麻の心情も知らずに…。

+++++

ピッ

『おつ。あまりにも遅いから切ろうと思ったところなんだ。……？  
？…なんでそんなに息が切れてんの？』

「や、なんで、も、ね、え…」

たった今教室で聖のことを話していたのだ。

彼女は今、芸能人のような存在だ。だから教室で電話した場合、クラスメート（主に青髪ピアス）になんて言われるか解ったもんじゃない。

「…ふー、ところで何かあったのか？電話してくるなんて珍しいな。」

今までメールしかやり取りしてなかったのだ。

内容はたいてい『おいしい喫茶店を見つけた』とか『今日もビリビリに追いかけられた』とかそんなたわいない話をするだけだが、上条当麻はこの時間がすごく楽しいのだ。

好きなものや嫌いなもの、意外と仕事に対しては真剣なところ、1つ1つ知る度に聖のことが解るようになってきて嬉しく思っている。聖も今の上条当麻を知ろうとしてくれている。

それもどれだけ嬉しくて泣きそうになったのかを聖は知らないだろう。

今の上条当麻にとって聖とのやり取りは記憶を失う前の自分を気にせずにありのままの自分をさらけ出せる貴重な時間なのだ。

ただそれはメール上でのやり取りであり、お互い電話をしたことがない。

それは授業・勤務時間中に電話をかけたなら相手の迷惑になるだろうとお互いに考慮したためである。

『ちょっとなー……。当麻に時間があつたら手伝って欲しいなーと思つて……。』

何とも歯切れが悪い。

「……仕事のことだつたら手伝えねえぞ？上条さんは普通の学生さんですよ？できませんって。」

『違う違う。それは俺がやるべき仕事だから自分でやる。当麻にやつて欲しいことは仕事じゃなくて、片付け。』

「……？」

『……俺さー、外国から帰国したばかりじゃん？当然、学園都市に帰つたばかりじゃん？』

「そうだな。」

『どうやらあっちに行っている間にマンションの改築工事やつたらしくて…。ありがたいことに先生が俺の荷物全部預かってくれてて、処分されずに済んだけど…。おかげで帰国してもしばらく病院で仮住まいしてた。』

「…初耳だぞ、それ。」

『あー、今言った。それにもっと前に言ったら当麻なら「俺の部屋に来ればいいじゃねえか。」とか平気で言い出しかねないし。こっちは構わないがそこまでしてもらうのも悪いしな。』

「…。」

確かに言いそうである。

今はインデックスと同居しているため、それはないと思うが…聖のために何かしただろう。

『んで、5日前に改築工事が終わったから、預かってもらった荷物を全部戻すことになったんだよ。私物の片付けはなんとか終えたんだけど…。仕事に関する書類やファイルがまだ段ボールの中なんだよ…。』

「ほう。」

『…なんとか自分で片付けようとはしたんだけどさ…。来週は学会があるから論文もまとめなきゃいけないし、資料を見ようとしても段ボールの中でどこにあるのか解らないし、見つからないし、この後探す時間が…。とてもじゃないがあまり確保できないんだ…。』

「てことは…学会まであまり時間がないから資料を探すついでに整理して欲しいってことか？」

『そうなるな。』

なんだか疲れてるのか声に覇気がない。

「解った。ついでだからなんか飯でも作ってやるよ。」

『おー…。つて、はあ！?』

「どうせ、飯作らないでカロリーメイトとか済ましてんだろ?それじゃ身体に悪いからなんか作るって言ってるの。」

『…なんで解るかなー?当麻は…』

当たってたらしい。

聖は仕事に真面目な分、食事とか疎かにしてそうだったか…やっぱりか。

『…解った、お言葉に甘えるよ。時間が空いたらなんか奢るし…あれがとうな。』

「いえいえ。どーいたしまして。…つか仕事し過ぎなんじゃねえの?今朝もそうだし…。」

『今朝?』

「テレビ、出たただろ?」

『あー…、『国境のない医師団』で歴代最年少団員だったから…その経験を語っただけだ。この手のマスコミは払いのけると後が恐いからな。』

本当は出たくなかったんだけどな、と聖が苦笑しながら言う。

『俺の態度が悪いと俺の先生のイメージも悪くなるんだ。先生のイメージが悪くなると今度は病院全体のイメージが悪くなるようなもんだよ。強調しすぎかもしれないが、あるんだよ。世の中にはない。しまいには患者が1人も来なくなるかもしれない。』

「げ…。」

絶句した。

実際はそんなことはないかもしれないが想像してみると恐ろしい。

『医者が医療ミスをした。そのことが問題になって記者会見を開いてカメラの前に謝った。果たしてこれで病院のイメージが悪くならないか？違っだろう。ただ医療ミスをしただけでイメージが大幅に下回る。謝ったところでどうにもならない。これは変えられない事実だろ。それと同じだ。』

「……。」

『イメージってのは結構大事なんだ。俺のせいで潰れたなんてシャレにならんし……。それに患者さんに申し訳ないだろ。』

「…訂正。やっぱ聖はすごいヤツだ。」

『はあ？』

普通の女子と何も変わりもないと思っていたが違った。

聖は病院や患者のためにちゃんと考えて行動して、回ってくる仕事も人に頼らず自分でやっている。

正直すごいと思った。

「なあ、聖。仕事とかイメージとか頑張るのもいいんだけどさ、たまに息抜きしないとお前が潰れちゃうだろ。俺がいるんだ。俺にできることならやってやりたいし甘えてもいいんだぜ？」

すごいけど俺たちより2歩3歩以上社会に出ているせいか、かなりムチャしているのが解る。少なくとも当麻はそれを解っていた。

『…それなら問題ないさ。』

「え？」

『今さっき甘えたばかりだ。書類を整理するついでに飯も作ってくれるんだろ？…それに俺には仕事仲間もいるが…正直甘えるとか助けを求めるとか…そういった行動は今のところ君にしかできない。』

「…そっか。」

ストリートすぎる言葉に正直照れて顔が熱いが、それ以上に心が暖かくなるのを感じた。  
嬉しかった。

「じゃ、じゃあ4時ぐらいに行くわ。また後でな。」

「おー。んじゃ俺ん家は…後でGPSの使用コードをメールで送るよ。そっちの方が解りやすいだろ。あ、あと当麻。」

「どした？」

『そっちの授業は大丈夫なのか？この時間だと5限目すでに始まってんじゃないのか？』

$$\begin{matrix} \wedge \\ \vdots \\ ? \end{matrix}$$

思わず携帯電話の時計を見る。

P  
M  
1  
:  
3  
5

5 限目開始してから15分経過。

「不幸だあああああああああああああああああああああ  
ああ!」

ぶちツ

電話が切れた音である。

おそらく今頃は全力疾走で教室に向かっているだろう。

「あー…なんか悪いことしたかな？」

聖は自分の研究室でパソコンに向かいながら例の論文の続きを作成し始めた。

しばらくして何かを思い出したかのように携帯電話を取り出し、あの人物に電話をかけた。



『…どうした？』

男性の声である。まるで聖がかけて来るのを解っていたかのような返事だった。

「ああ…、当麻が前の当麻と全然変わらなくてな…。嬉しいんだよ、当麻が当麻のままです。」

『…そうか。』

「君はいつになったら当麻に会う気なんだ？このままだと…。」  
『…………。』

「…君の気持ちはよく解ってる…。なにしろ…」

「…君は当麻の…。」

聖は電話の彼に向かって悲しみや優しさを交えた複雑そうな声で言葉を放った。

その言葉は彼女以外誰もいない部屋に響いて溶けていく…。

## 俺の幼馴染はすごいヤツ（後書き）

とある2人の夜のメールやり取り

当麻「うー… 今日もビリビリに追いかけられた…。 いったい何なんですか上条さん何かしましたか？ 頼むからもう追いかけないで…。」

聖「それ、俺に言ってもねえ…。 んで？ そのビリビリってのは何だ？ まさか『ダーリンだっちゃ』<sup>v</sup> ってやつか？ それはいけない。君の妄想としてはかなり痛すぎるぞ。」

当麻「人の苦悩を妄想で片付けようとすんな！！ あと時代が古すぎ！… はあ… ビリビリってのは常磐台の御坂美琴ってヤツだよ。なんだか知らねえが会う度に勝負を持ちかけて追いかけてられてんだよ…。」

聖「へえ。面白い人だなんて… 御坂美琴！！？ ちょ… 待って！？ なんで御坂美琴と！！？ え… お、落ち着け…！ 名前が同じだけで赤の他人かもしれない…！」

当麻「しかも人に向けて超電磁砲を平気で放すし、何度死にそうになったことか…。」  
レールガン

聖「ぶばあ！！？ もうもはや間違いないだろ、ソレ！！！！！！」

当麻「？ さっきから何騒いでんだ？」

聖「君のせいだよ！！！！」

## 必然的な出会い？

「御坂さ〜ん、白井さ〜ん、こっちですよ〜！」

「そんなに大きな声で呼ばなくてもいいんですよ？ちゃんと聞こえてますから、初春。」

「はあ〜初春つてば、単純だなあ。」

「そこが初春さんの良いところじゃない、佐天さん。あ、ここでしょ？最近新しくできた喫茶店つて。」

第7学区にある黒白赤しか彩られていない斬新な喫茶店だが、大人っぽくて雰囲気もよく、コーヒーの香りもしつこくなく、デザートも美味しいということで評判を呼んでいる。4人の少女は…というより頭になぜか生花がたくさん飾っているヘンテコな少女・初春に呼ばれて来ただけが、他の3人もそれなりに楽しみにしているようだ。

喫茶店に入ると、そんなに広い訳ではないがほぼ満席状態だ。

「うわあ！お客さんがいっぱいですね！」

「ホントだ…。女の人だけじゃなく男の人結構いる…。割合半々…ぐらいだよな？」

「そうですね。この喫茶店のデザインが女性向けではなく中性的で現代アートのような感じですから殿方も入りやすいんですよ。ねえ、お姉様。……お姉様？」

お姉様と呼ばれている少女・御坂美琴は先ほどの3人の話など耳に入っていなかった。

店内の入ってから見えてしまった黒くてツンツン頭の男が店の端にいる。

男と向かい合っている人…後ろに向いてるから顔は見えないけど髪

が長いから多分女性だと思われる人と楽しくお茶をしていた。…と  
いうより御坂にはそう見えていた。

「…アイツはいつたいここで何をしているのよ……！！！」

### 第3章 必然的な出会い？

上条当麻と向かい合っている女性の正体は彼の幼馴染である月神聖  
だった。

彼女は今…笑っていたが猛烈に怒っていた…。

「さあ…。説明してもらおうか、上条当麻くん？」

「……えーと…これは…」

聖の手の下には上条当麻の診療簿があった。

これは聖の恩師であるカエル顔の医者から渡されたものだ。

先生曰く

『月神君は誰よりも上条君の傍にいますからね。君はまだ若いから患者さんを受け持つことはできないけど彼ならやってもいい。その方ができることが多いからね。』

何のことだと思ったが当麻の診療簿を見たとき驚愕した。

なっつつんじゃこりやー！！！！と叫びたくなったが、驚きすぎて発声すらも叶わなかった。熱傷、切創、骨折、全身打撲、一部の内臓の圧迫など…。しかもどれも怪我の度合いが半端ない。この中で1番驚いたのは右腕の切断だ。

なぜ切断されていたのか解らないがよく生きてこれたと思うほどだ。

いや、先生が治療しなければどこが後遺症や障害が起きてもおかし

くない。

ありがとう先生…。

しかし、当麻はよく喧嘩をする方だが、これは喧嘩で負うような怪我じゃない。

まるで戦争の中心に赴いた者が負う怪我だった。

聖はかつて貧しい国を巡って無償で診療を行う『国境のない医師団』の一員だった。

貧しい国を巡るのだから当然、紛争や地雷などに遭いやすかった。

そこで負傷した何十人も治療してきたから、怪我の程度で争いの度合いが判別できる。

そういえばこの前もそうだった。

この学園都市で展開されていた無数の翼のような物体が消えた後、当麻はびしょ濡れの恰好で怪我の治療のために私の下へ訪ねて来た。あの日もそうだった。いつだったか当麻はなぜか小麦粉まみれで家に訪ねてきた。もう夜も遅かったので泊まらせてくれと疲れたように弱々しく言われたのを覚えている。制服の下に隠れていた打撲の数々は喧嘩で負う怪我ではなかった。

数日前は第22学区第7階層にある救急救命病院から緊急連絡を受け、1人の少年が重体のため至急こちらに来て手を貸して欲しいと言われた。先生は病院から離れることができないため、かわりに俺が赴いたのだが1人の少年が当麻だったことはすごく驚いた。

当麻はこの短い期間でいくつもの事件に巻き込まれている。

そして巻き込まれている原因はやはり…

「…言いたくなきゃ言わなくていい。君に怒ってるんじゃないんだ。怪我したら俺たち医者が治せば良い。そのために俺たちがいるんだから。ただ…」

「…聖？」

「…俺が悔しいんだ。当麻がどんな目にあっても力になれないのが

悔しい。だから君の診療簿を見たとき自分に怒ったんだ。『どうしてこのとき当麻の傍にいてやれなかった』ってな。」

聖の端正な顔立ちが苦渋に歪む。昔から当麻のことになると冷静ではいられない。それは自分でも自覚している。それほど当麻は大切な人なんだ。

むにっ

………？

当麻の指が聖の頬を思いつきり左右に引っ張っていた。

「にゃ、にゃにお…！」

「ごちゃごちゃ考えすぎなんだよ、お前は。」

ぱつと当麻は手を離れた。

聖は自分の頬をさすった。

当然だが、痛かった…。

「確かに短い間でこんなに怪我してくる俺が悪いけどさ。でも、俺はピンピンしてるし、ちゃんと聖の前にいる。過去のこととどうにからないことをごちゃごちゃ考えんな。過去より今だろ。それに力になってないなんてことはねーぞ？俺はいつもお前に甘えてるばかりだ。どんな怪我してもなんも言わなかったり、こうして隣にいてくれるじゃねえか。」

「それは俺がしたいこと。それに当麻に甘えられるのは悪くない。」

聖はふつと穏やかに笑った。

「それでいいんだよ。」

と当麻は言って穏やかに笑う。

「聖が俺にしたいことは俺が望んでることだからな。」と、さらっとすごいこと言ったが気に留めなかった。それは聖も同じだからだ。当麻が聖にしたいことは聖が望んでいることなのだ。

「はー…なんかどうでも良くなってきた。なーんか俺大人げなかったな。悪い、君に当たるのは筋違いだったのは解ってたんだが…。」  
「いや。聖もそういうところなんだなーと上条さんは安心しましたよ。」

「えっ。なにそれ。」

「だって、大人っぽいじゃん。働いてんじゃん。ホントに同じ年かと思うぐらいだぜ？ちなみに俺この喫茶、初めてんだけど何がおすすめなんだ？」

「精神的は君らと同じだ。仕事になると子どもではいられないだけなんだよ。この喫茶はカプチーノが1番うまい。」

2人は笑いあいながら、いつもの通りの日常的な会話に戻っていた。

カタンッ

「そつか。じゃ、それにするか。すみませーん。オーダーお願いします。」

「デザートは良いのか？」

「あつ、忘れてた！どれがうまいんだ？」

「1番人気なのはスフレだ。ふわふわでとろけるような味わいで美味しい。」

バチンッ

「お待たせしました。ご注文をどうぞ。」

「あ、すみません。デザートセットでカプチーノとスフレのブルーベリーをお願いします。」

「こっちはカプチーノとスフレのハチミツを。」

ちなみにスフレのブルーベリーを注文したのは当麻、ハチミツを注文したのは聖である。

バチンバチンッ

「ご注文承りました。少々お待ちください。」と言って、優しい笑顔の女性店員は向こうへ行った。：行った後、隣のテーブルに座っている4人の少女が見えてしまった。：4人のうちの1人はなぜか放電して、ものすごい形相でこっちに睨んでいた。見覚えがあるが気のせいだ、うん、気のせい。

「まあ、周りは大人だからそういう気持ちも解らなくは「あ・ん・た・はどうしてそうやっていつもスルーするのよっ！！」」

バリバリバリッ！

「あわわ…！御坂さん、こんなところで電気を放さないで下さい！」

「お姉様、こんなところで能力をお使いになるつもりですか？」  
「くっ…！」

先ほどまでの効果音は御坂たちによって発した音である。

（カタンッ＝4人が客席に座った音　バチンッ・バチンバチンッ・バリバリバリッ＝御坂美琴が発した放電の音）



店の中では人が多いため御坂の能力を今ここで使うのは得策じゃない。おかげで当麻は命拾いしたが…。

「どちら様？」

聖がそう言つて、4人の少女は聖の方を見る。そして固まった。

「…どうしたんだ？彼女たちは当麻の知り合いか？」

「あー…ツインテールと短髪の方は知ってるけど、他の2人は初めて会うな。」

…ちらりと御坂たちの方を見た。

彼女たちが固まってしまうのも無理もない。聖はかつての『国境のない医師団』の一員であり、幼い頃から医学界の天才と謳われている。加えて一度のテレビの出演で聖の美しい容姿に誰もが見惚れていたことだろう。それで雑誌、新聞などありとあらゆるところに聖のことを無断掲載されていた。記者の行き過ぎた勝手な行動のせいで仕事に差し支えるため本人から怒りの言葉で牽制した後、目立つ行動はしなくなり、今はやっと落ち着いたところだった。総じて聖は今、有名人であり、学園都市で彼女を知らない者はいない。

「お待たせしました。カプチーノとスフレのブルーベリーとハチミツをお持ちしました。」

先ほどの店員さんが注文したものを持ってきた。それが4人の意識を取り戻すキツカケとなった。

「んじゃ、当麻、温かいうちに食べようぜ。ホントにすんげーうまいから。」

「あ、あの一。」

食べ始めた当麻と聖に御坂は声をかけてきた。なんでコイツがこの人と一緒にいるのか訳が解らないという疑問に満ちた表情だった。

「あ、あなた、月神聖さんですよ？なんでコイツと一緒にいるんですか？」

「…聖といちゃワリーのかよ…。」

「俺は当麻の友人だよ。友人同士が喫茶店にいてもおかしくはないと思うんだが。ときに君？」

「は、はい。」

御坂はときどきして、ちよつと顔が熱い。

彼女が滅多に見られない美女だからなのか、それとも当麻と一緒にいた女性だからなのか解らないが緊張していた。

「御坂つてことはあの超電磁砲レールガンの御坂美琴か？いつも当麻を追いつけている女の子だろ？」

「あ、はい。…ってアンタそんなこと言つてんの！！??」

「ホントのことだろ！？って電気ブツ放すな！お客さんに迷惑だらーが！！」

「へー、本当だったんだ。お会い出来て光栄だ。知っているかもしれないが俺は月神聖だ。そちらの3人も良かったら紹介してくれないか？」

聖はふんわりと笑ったら、4人の少女の顔が赤くなった。  
…どうして女の人に照れなくてはいけないのだろうか。

「えー…ごほんつ。私は白井黒子と申します。お姉様と同じ常盤台ジャッジメント中学校に所属しております。風紀委員も勤めております。」

「わ、私は柵川中学1年の初春飾利です！し、し、白井さんと同じ

く風紀委員をやっています!!」

「初春、緊張しすぎ!あたしは初春の同級生の佐天涙子です。あ、でも風紀委員はやってません!」

「御坂さんに白井さん、初春さん、佐天さんだな。ちなみに今日はどうしたのか?」

「あ、今日はここのお店がすごくおいしって評判で、ぜひ1度食べてみたいと思って皆で来たんです!」

「そっか。なら急いだ方がよい。今日は日曜ってこともあってデザート…とくにスフレが売り切れるのが早いんだ。」

「そうなんですか!?わわっ早く決めないと…!」

4人は慌ててメニューの方を見た。

「…柵川に常盤台ねえ…。」

「?なんか言ったか?」

カプチーノを美味しそうに飲んでいた当麻に尋ねられて、聖は笑顔で

「いや、なんもねえよ。」

(…そろそろアイツらが転入してくる頃だよな…。)

笑顔の影で聖はそんなことを思っていた。

## 必然的な出会い？（後書き）

とある天才の幼馴染の仕事

聖「もぉ〜！キツイ！！」

当麻「仕事か？患者1人も受け持っていないはずだろ？」

聖「君以外はな。」

当麻「なのになんでこんな仕事があるんだ？」

聖「医師つてのはな患者を受け持って治療すりゃいいって話じゃないの。治療・手術に必要なコスト、必要があればコスト削減、治療・手術に使う薬品とか機器も全部そろえなきゃいけない。他にも色々あるけど…。しかもそれらをデータ化になきゃいけないからパソコンも使う。大雑把に言うと俺は情報処理の役割？みたいなものかな。あとは患者の精神負担を減らすためにも対話、お遊戯会などもあるし…。必要な時はカウンセラーを勤めることもある。」

当麻「…大変なんじゃね？」

聖「大変なんだよ。」

当麻「…（汗）」

聖「まあ、患者が元気で笑顔になってくれればそれでいい。さらに終わりが良ければ全て良し！そう考えられるのも当麻がいてくれるおかげなんだよな。」

当麻「へ？」

聖「独り言だよ。」

## 必然的な出会い？（前書き）

学業のため更新が遅くなります。

ご迷惑おかけしますが、何卒ご理解ください。

## 必然的な出会い？

AM 8：10

柵川中学校校門前

「柵川中つてここ？」

「そうみたいだな。というか早く行こうぜ。時間が差し迫ってんだ。」

「お前、職員室の場所解んの？」

「…解らねえ。」

同時刻

常盤台中学校校門前

「…なーんであたしだけがここなんだ…。」

## 第4章 必然的な出会い？

PM 3：18

とあるファミレスにて

「「転入生？」」

御坂と白井はそろって声を出した。

ここはとあるファミレスでいつものように4人で集まっている。

4人は注文した飲み物を飲みながら、今日柵川中学に来た転入生のことを話していた。

「そうなんです。男の子2人なんですけど…。」

ずーん…として初春の周りの空気が重い。

…なにかあったのだろうか？

「…どうかしたんですの？初春。」

「あー。初春の気持ち解るわ。あの2人、ピアスしてるんだ。その1人が同じクラスになってね。うちの校則はアクセサリー着用すんの基本禁止だし、初春は風紀委員として注意したんだよ。それが…」

ジャッジメント

〈回想開始〉

『あ、あの初春飾利といいます。少しお話ししても良いですか？』

『初春さん？別に良いけど…。あーそうそう朝も自己紹介したけど、俺は香椎<sup>かしい</sup> 皐月<sup>さつき</sup>。よっしくー！そっちから名乗ってんのにこっちは名乗らないって訳にはいかんでしょーよ！』

今日、私たちのクラスに転入してきた香椎という男の子は目立つ容姿をしている。160cmもあり、見た目は普通の体型だけど、服の上からでも解るほど鍛えられた身体をしていて体格がいい。…じやなくて！どこ見てるんですか、私！ごほん、仕切り直して…恰好は普通の制服を着ている。髪は何故か茶髪でも金髪でもなく黒みの緑髪だった。カラコンでもしてるのか、瞳は珍しいエメラルドグリーンで男の子なのにすごく綺麗だと思った。赤やオレンジ色のガラス玉（？）の飾りが付いたリング状のシルバーピアスを両耳につけている。顔立ちは…かっこいいけど…いやいやそうじゃなくて！とにかくピアスはダメです！どんなにかっこ良くても目立っても、ここは風紀委員として注意すべきです！

ジャッジメント

『あの…失礼ですが私は風紀委員です。ここの校則は基本アクセサ

リ―着用禁止です。なので、そのピアスを外して頂けませんか。』

大勢のクラスメートに見守られながら、毅然とした態度で初春は香椎に言う。

そして香坂の答えは…。

『ヤダ。』

『…へ?』

『ヤダって言ったの。あと髪と目を黒くしろって言われても、生まれつきのもんだから無理。』

『へ!? そうなんですか!? え!? でも、ピ、ピアスは外せますよね?』

『ヤダ。ムリ。耳をぶつた切られても断固拒否する。』

『ええ!? で、ですが、ジャッジメント風紀委員としては校則は守らなければ困ります。先生方々も…。』

『ああ、困ってたね。でも、何度も言われてもイヤだから。』

ここまで嫌がるとは…。

…どうしよう…。

『…んー。そうだな。初春さん可愛いし、オネガイ聞いてやらないこともないかも。』

『え! ほんとですか!?』

『うん 君からキスしてくれたらね』

『…へ??』

そしてそのとき、それを聞いたクラスの皆が騒ぎ始め、先生たちが駆けつけなければならぬほど騒ぎが拡大してしまったのである…。



〈回想終了〉

「…なんですよ、その殿方は。」

「女の子に対して信じられないオネガイゴトね。サイテーだわ。」

「でしょ、でしょー！初春、あんな男放つときなさい！」

「で、ですが、ピアスはー…。」

しばらく、香椎に対して白熱した議論を交わしていたが、4人の少女はやがて落ち着き始めた。

「ぜえぜえ…そういえば転校してきた殿方は2人ですわよね？もう1人はどんな方ですか？」

「はあはあ…そっちの方は香椎ってヤツと違ってちゃんとしてるって感じ。でも同じ日に転入したからなのと同じピアスしてるからなのか香椎ちゃんと仲がいいみたい。」

「げほっ…彼はC組…隣のクラスに入りました。名前は風間かざま 潤じゅんくんです。」

「ふう…って、あれ？うちの学校にも転入生来てなかった？」

「ええ。その方は私のクラスに入ってきましたわ。この半端な時期に転入してくるのは珍しいから学校中噂になってますのよ。」

「名門の常盤台ですもんね。どんな人ですか？」

「彼女は麻生あそう 零れいという方です。なんとというか…凛然として強かな方のように、彼女の周りに多くの女生徒に囲まれておりましたわ。

おかげで私は挨拶もできなかったんですの。」

「な、なんだかすごそうですね…。」

「そうね。こんな時期に転入してくるから只者じゃないでしょうけど。しかし同じ日に転入生だなんて…すごい偶然よね。」

+++++

++ +

P M 3 : 4 6

第7学区????通り

「へーっつくしよい!!」

「うわ!!びつくりしたー…。すごいくしゃみだな。風邪か?」

「ワリイワリイ。誰が俺のこと噂でもしてんのかね?」

「それが本当ならあんたは毎日くしゃみしてると思っけどね。皐月。

」

「そりゃそうだ。んで?常盤台はどうだった、零。」

「…いかにもお嬢様学校って感じ…。漫画みたいで…やっぱり性に合わないね。あたしもそっちに転入したかったなー。」

「ダメだろ…。で、会えたか?『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』と。」

「ぜーんぜん。今日は女の子に囲まれて身動きも取れなかったよ。

データはあるんだけどね!。ごめんね?潤。」

「いや、別に。っーか顔が謝ってないぞ。笑いながら謝られても意味ないし。」

「まーまー、おしゃべりはここまでにして…俺はそろそろ『家』に帰って『お片付け』始めたいけど?」

「解ってるって。」

「そんじゃ、あそこのドーナツを食べてから『家』に帰ろっか。」

++++++  
++++++

P M 5 : 0 8

月神聖が住むマンションの玄関前

この日、聖は仕事の区切りをつけたのかお休みをとっていた。

当麻は聖の顔を見に行くぐらいいいだろう…と思ってやってきたのだ。

しかし、思っていたよりも疲れている様子なので、軽食にハチミツレモンとお粥を作って食べさせたら、電池が切れたかのようにぱったりと倒れて眠ってしまった。

このまま寝させるわけにはいけないので彼女をベッドに入れて、家に鍵をかけてからポストに入れた。

「つたく、無茶しすぎだっつーの。」

あいつらしいけど、心配する方の身もなっくれよなー。

…今度会ったら言つとこうかな？…うーん、それでも無茶しそうだな。

なんだって聖は命を重んずるヤツだから。

急患がでたら全力で駆け込める。医者としては立派だと思うが、いつも駆け込んで倒れるのであれば周りが心配する。

もちろん、俺も。

どん！

「うわ!？」

「わああああ!!?」

どしゃーー。

考え事に没頭してたから、目の前に近づいて来た男に気づけなかったらしい。

当麻はよろける程度に済んだが、ぶつかってしまった男は派手に転んでおり、男が持っていたらしい資料らしきレポートや本もあちこち散らばっていた。

「うわあ！！すんませんすんません！考え事して…大丈夫ですか！？」

「大丈夫です大丈夫です！申し訳ありませんがレポート…じゃなくて！紙、集めるの手伝って下さいませんか！？？」

「もちろんです！」

（（紙が風で飛ばされたら大変だ！））

2人は風で飛ばされないように早く散らばった紙をかき集めた。そのとき当麻はちらつとかき集めた1枚の紙の内容を見る。

どうやら外国語で書かれてあるようで読めないが、グルッと円が描いてあって中には三角や四角…読めない文字も書かれてある。まるでゲームに出てくる魔法陣のような…

魔法…？

「ふー、ありがとうございます。助かりました。すみません、俺の不注意でぶつかってしまつて…」

「あ！い、いえ、俺の方こそ！はい、出来る限り集めました。俺が見た限りこれで全部ですが…」

男は当麻が集めた紙を受け取って、集めた紙の枚数を数えていた。

「うん！全部そろつてる！本当にありがとうございます！」

「良かったです。あ…そのつかぬ事お聞きしますが、それは？」

「え？これですか？」

こくこくと当麻は縦に首を振る。

自慢ではないが何故かそちら側との関わりを持っている。

そして、もしインデックスを狙う魔術師の1人が目の前にいる男だったら、早急に手を下すしかない。

「自慢じゃないけど俺、17歳で一応大学生なんです。考古学が専門ですので…。結構、膨大な量ですから毎日勉強しておかないと遅れてしまふんですよ。あ、それからこれは西洋文化に関する資料本です。今回のレポートの課題はオカルトに関する事なんですよ。」

レポートはまだ途中だけだね。と笑った。

どうやら魔術師じゃないらしい。良かった…。

…って

「だいがくせいいいいいい！！！！？」

「わあ！？」

当麻が大きな声で出してしまったため男は驚かしてしまった。

周りの人も当麻を見ている。視線が痛い…。

「わ、悪い。え？ほ、ホントに？17歳なんですか？てか17歳で大学生になれるもんですか？」

「なれますよ。君の目の前にいるじゃないですか。そりゃ日本じゃ飛び級できないけど、俺は留学生でもあるから日本の大学の講義は受けられますよ。」

「留学生？外から来たんですか？…てことは能力は…。」

「はい。一時的に滞在するだけだから持ってないです。しかも学園都市に来たのは最近なので、道が迷路みたいで解らないんですよ。

困りますよね…。」

「えと…じゃあ良かったら俺が案内しましょうか？」

「え？本当に！？いや、助かるけども…！えと…いいのかな？」

「俺でよければ構いませんよ。」

「ありがとうございます！えーと君は…？」

「あ、上条 当麻です。」

「あ、敬語はいいですよ。これからもう会いますから堅苦しいことはナシにしませんか？俺は皇<sup>おう</sup> 雷河<sup>らいか</sup>。よろしくね、当麻。」

「そっか、じゃあお言葉に甘えて…。なんか中国人っぽい名前だな。よろしく、雷河。」

「中国人ですよ。」

互いに握手を交わした。

そして当麻は学園都市について色々な話をすると、ふと疑問に思ったことを言った。

「日本に来たばかりでワリには日本語うまいよな。」

「そうですね。実は子どものころ日本に住んでたんです。そのとき仲が良かった友達から日本語を教えてもらったんですよ。おかげで日常生活で差し支えがないほど上手になったと思います。」

「へー。その友達って雷河のことすげえ好きだったんだな。じゃなきゃ日本語を教えるなんてそんな難しい事できないよなー。」

何気なく言ったが、当麻を見る雷河の視線の感じがふと変わった気がした。

まるで泣きたくなるような、でも嬉しいようなそんな複雑な感情が顔に出ていた。

でもそれは一瞬の事で、あとはもういつもの通りの表情に戻っていた。

「そうですね。そうだといいです。俺も彼のことが好きだった。」  
「そっか。」

（ん？好きだった…？なんで過去形？）

「うわ！？もうこんな時間？すみません。このあと用事があります

のでこれで失礼しますね。」

「お、おう。じゃ、またな！」

（まあ、大した意味じゃないだろ。）

そう思いながら、当麻は帰りを待つ1人の少女がいる自分の家に向かって歩いていった。

雷河は帰っていく当麻の背が小さくなるまで見つめていた。

「…本当に忘れてしまったんだな、当麻。」

寂しく、悲しく呟いて

「でも聖が言っていた通りだ。記憶を失っても君は何も変わっていない。君は君のままなんだな。」

変わらない友達に本当に嬉しく思っていた。

「さて、アイツらは『お片づけ』始めてるから、こっちも早くやらないとな。」

そして

「当麻は渡さないよ。アレイスターⅡクロウリ。」

窓のないビルを見ながらそう言った。

必然的な出会い？（後書き）

聖「雷河？どうしたんだ？君から電話してくるなんて。」

雷河「当麻に会った。」

聖「やつーとかよ。んで、どうだった？」

雷河「君が言ってた通りだった。当麻は当麻のままだったよ。」

聖「だろ？」

雷河「あはは…。これじゃ学校で待ち伏せとか付いていく必要はなかったみたいだな。」

聖「…そんな事してたのかよ…。（ストーカーじゃん。）」



## 人物紹介（前書き）

折角ですのでイラストも描きました。

文章だけでは人物をイメージしにくいと思ったので、下手ですが差し支えがなければどうぞ。

## 人物紹介

> i 1 4 4 1 7 — 2 0 0 2 <

名前：月神 聖 つきかみ ひじり

年齢：16歳

身長：166cm

体重：「教えねーぞ。」

絶世の美女だが男勝りで正義感のある当麻の幼馴染。

10歳で外の大学で首位で卒業し、14歳で医師免許を取った医学界の天才児。

彼女は当麻の幼馴染以上恋人未満。けど、お互い恋愛感情はないので恋人同士にはならない。そんな不思議な関係です。

けど性別に関係なく対等に付き合える関係はそうそうないんじゃないかな。

道は違えても、心は同じところにある。そんな感じが欲しくて彼女が生まれました。

結果、何故か絶世の美女なのに男勝りという不思議な設定がついてしまいました（笑）

なんてこったい（笑）

> i 1 4 4 1 8 — 2 0 0 2 <

名前：香椎 皐月 かしい さつき

年齢：13歳

身長：163cm

体重：「ノーコメント。」

柵川中学校に来た謎の転入生。

黒みの緑髪にエメラルドグリーンの瞳をもった目立つ風貌をしている。

両耳に赤やオレンジのガラス玉（？）の飾りがついたリング状のシルバーのピアスをつけてる。

彼は今の世で言うチャラ男？だと思います。

まだ謎が多い人物の1人ですので、あまり書く事はないですね。

まあ、13歳で女の子にキスを求める変態男だと思っただけでいい（笑）

13歳でキスなんてあるのかな...？どうだろう？

## 人物紹介（後書き）

他の人物も後ほど描きます。

もうしばらくお待ちください。

挿絵は…どうしよかな…？

あった方が良いのか、ない方が良いのか解らないので感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5186o/>

---

とある天才の幼馴染

2010年12月5日00時39分発行